

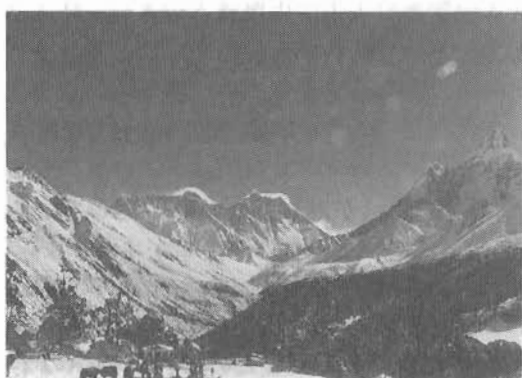


ワンダーフォーゲル・ネパール隊



——エベレスト街道——

教育学部学生	石田 明宏	総合科学部学生	福田 一教
理学部学生	鈴藤 正史	総合科学部学生	平川 法義
		工学部学生	中野 拓也



伝説に包まれた神々の国、世界の大地の尾根、ふれあいの旅、ネパール。ここに我々は行って来た。

今年2月28日、広島を発ち、途中、名古屋にて低圧低酸素トレーニングをして、3月5日、成田発バンコクへと機は飛び立った。

バンコクに降りるとそこは夏、冬から夏への変化もものともせず、一夜を屋台の食事ビール片手に楽しみ、初の訪問国を味わった。

翌日の昼にバンコクから3時間の飛行機の旅。ネパールの首都カトマンズに着陸時に窓から見える街の印象は「赤茶けたところだ」と。カトマンズは1400mの高原にある。タラップから降りる時の吹く風はさわやかで、心地良い。踏んだ大地は夢に見た国ネパールなのだ。一生忘れぬだろう一瞬間。

それから数日は山に入る事前の準備などで街を歩く。文献や写真集のみでしか知る事のできなかったネパールの素顔があり、動く人々がいた。インド系の彫の深い顔、東洋系の親しみのある顔、いろいろである。この街

は古く数百年昔からの建物が建っていて、その古き建物の中で人は生活を送っている。旧国王の宮殿・ラマ寺院等、仏教とヒンズー教文化が混ざり合ったネパール文化を代表しているなあ、と感じつつ一つ一つ見ていく。

さて、今はAM7時、セスナ機の中、我々以外に米人、カナダ、スウェーデン人、シェルパ。国際的だな。飛行を続ける機は左側にヒマラヤ山脈を見渡して行き、山腹の飛行場に着く。辺りを見ると、白い雪を頂く山々が



我々を歓迎してくれた。透き通る青い空と、白い雪と岩の肌の山とのコントラスト、村々の家、土の色、シェルパ族の瞳までもが新鮮に目に写ってきた。

ここでコースの説明をすると、セスナの着いた所がルクラ、ここから18日かけて目標の山カラパタール(5,500m)へ往復する。宿泊、食事は村々にある山小屋ですませ、エベレスト街道をゆく。街道とは現地の村と村とを結ぶ唯一の道であり、階段、岩肌、吊橋 etc いろんな変化を見せてくれる。山腹を水平に続く街道は遠くからでもはっきりわかる。この道を我々らトレッカー(注:登山者ではなく、山地、山麓を歩く人、旅する人)は歩く、いや歩かせてもらおうと記した方が良いでしょう。それはこの道はシェルパの生活用の道で、牛に似たヤクが荷をはこび、人々は少女、老人までもが竹で編んだ逆三角形の大きなカゴで、人と同じくらの大きな荷を背負い汗を流して、一生懸命歩いている。



クムジュンという村で我々は学校を見学させていただいた。生徒は小・中・高いて、ブレハブ校舎で学んでいる。ここで驚いたことに、教師の一人が日本語を話せるのだ。その人に様々な説明をしてもらう。村の全子供のうち裕福な家の子ら、半分が学校に来ている。英語は小5から始めて高校くらいで十分話す等。自分には彼らの意欲を感じ、はずかしい思いをしたのも事実だ。

そうして一行はティンボチェに着く。翌朝の空気冷たく、日の光も足下に届かず、その



霧囲気の中で見るサガルマータの雄姿は時間を忘れさす何かさえ感じる。

4日後いよいよ明日カラパタールへ行けるロブチェに泊まる。ここは4900mの高山でここに来る時も酸素がうすく歩くのも大変だった。この夜はみな多少なりとも頭痛を訴えていた。

この日がカラパタールへ行ける最後の日だ。必要品のみ持ち、氷河を横切り、それ伝いに高度をかせぐ。天候も良くない、持ちこたえられるか。目前にカラパタールが見えた。雪もちらちら降ってくる。もどる時間も少ない。この時、頂山に行くかやめるかリーダーさんの判断で「行こう。」と。眺めた時の山はなだらかなりしも、実際歩くとかなりきつい。10歩ごとに呼吸を整えつつ一步一步と登る。大きな岩をこえると頂上のケルンが積まれている。ここが山頂だ。

